

続 インターネットの言語空間における
「グローバル社会」に抗する者たちの連携
ーグローバル化とグローバル主義の違いに着目してー
**The cooperation on the Internet of forces against “a global society”
-A note on differences between globalization and globalism-**

加藤知子
Tomoko KATO

I. はじめに

2016 年は、6 月に英国で EU 離脱の是非を問う国民投票が行われ、EU 離脱派が勝利し、また、11 月には米国大統領選挙で、不法移民に対してより厳しい措置を取り、TPP 等の条約に反対の立場を表明しているドナルド・トランプが大統領に選ばれた。

しかしながら、その後も、英国 EU 離脱の動きやドナルド・トランプ大統領に対する否定的言動が続いている。その中に、グローバル化の流れは止めることができない（ので、英国 EU 離脱・トランプ大統領勝利に拘わらず、）多国間連携・協力が必要だ、という主張がある。

ここで指摘しておきたい重要な点は、EU 離脱派もトランプ大統領自身並びに彼の支持者たちも、そのような必要性は十分承知しているということである。例えば、EU 離脱派作成の動画 *BREXIT THE MOVIE*¹の中でも、トランプ大統領の勝利演説²の中でも、多国間連携・協力を否定などしていない。EU 離脱派やトランプ大統領支持者は排外的だと言われるが、彼等は移民を受け入れないなどとは宣言していない。

それにも拘わらず、英国 EU 離脱派勝利とトランプ大統領選出が、グローバル化と真っ向から対峙し排外的であるかの如くの雰囲気メディア上で醸成されている。

本稿では、イデオロギーとしてのグローバル主義 (globalism) と、現実としてのグローバル化 (globalization) との違いを指摘している論客を紹介しつつ、EU 離脱派とトランプ大統領支持者たちの主張を整理する作業を行いたい。

II. イデオロギーとしてのグローバル主義

グローバル化 (globalization) とグローバル主義 (globalism) の違いを明確に指摘しているのに、関岡英之がいる。中野剛志編の『TPP 黒い条約』の第二章「米国主導の『日本改造計画』四半世紀」は関岡の執筆箇所、その中に、「グローバリゼーションの『ゼーシ

¹ Brexit: The Movie (2016) *BREXIT THE MOVIE FULL FILM*.

(<https://www.youtube.com/watch?v=UTMxfAkxfQ0>) (2017 年 9 月 11 日閲覧)。

² トランプの指名受諾演説や勝利演説は、日本でも CD などに収録され、活字に起こされたものと日本語訳つきで、出版されている。例えば、『CNN English Express』編集部による『トランプ演説集』などである。同著 p.72 には、“At the same time, we will get along with all other nations willing to get along with us. They will be. We’ll have great relationships. We expect to have great, great relationships.”とある。

ョン』という接尾辞は客観的な現象を意味する」³、「グローバリズムの『イズム』という接尾辞はイデオロギーを意味する」⁴、とある。関岡の挙げている、ゼーションの例はモータリゼーション、イズムの例はコミュニズムである。現実とイデオロギーの峻別は、論点を明確化するのには欠かせないもので、例えば、現実としてのフェミニンさとイデオロギーとしてのフェミニズム、現実には生きている人としてのムスリムとイデオロギーとしてのイスラム（後者はオランダの政治家ヘルト・ウィルダースが頻用する線引き）等、センシティブな事項を論ずる時に、論点を見誤ったがゆえに解決の糸口まで見失うことを避けるためにも有効なものである。

中野剛志は、『TPP 亡国論』、『TPP 黒い条約』、『世界を戦争に導くグローバリズム』等、一連の著作で、グローバリズムとそのイデオロギー具現化の一例としての TPP に対して反対している。ただし、『TPP 黒い条約』等では、グローバリズムの発信源が米国であるとされているが⁵、その後米国では、TPP 反対のトランプ大統領が選出されたことを見ると、米国自身もグローバリズムに疲弊しているか⁶、あるいは、もともと、グローバリズムの発信源は米国ではなく、米国の名を借りた他の誰か（グローバル企業等か）であり、それに気付いた草の根の米国人が抵抗した結果のトランプ勝利だと見ることもできよう。トランプ勝利に向けて、草の根の米国人同士はもちろん、インターネットを駆使しつつ、海を越えて英国 EU 離脱派とも連携していた様は、加藤（2017a）でも言及した⁷。

イデオロギーとは、「①社会集団や社会的立場（国家・階級・党派・性別など）において思想・行動や生活の仕方を根底的に制約している観念・信条の体系。歴史的・社会的立場を反映した思想・意識の体系。観念形態。②特定の政治的立場に基づく考え」⁸であると定義される。言い換えればイデオロギーは、現象からボトムアップに作り上げられたものというより、反対に、社会成員の思想や行動（現実）を上から決定していくものである。従って、現実に左右されるということが少なく（イデオロギーが現実を制約するとされるので）、その点でイデオロギーは動的要素を欠くものであると言える。

類似する線引きに理想主義と現実主義があり、中野（2014、pp.42- 43）では、E.H.カーの『危機の二十年』を引きながら、「理想主義の思想は絶対的・静態的な性格を有する」⁹、「現実主義はもっと動態的であり、相対的である」¹⁰としている。

国境を無くして地球全体が一つの共同体になれば上手くいく、国境なき世界こそ理想だ、とするグローバル主義は、国を開いて、あるいは、国境を低くすることによりもたらされる現実的な課題を見えなくしてしまう。それらの課題を取り上げ議論することが、理想という鏡を曇らせるのを、グローバル主義者が潔しとしないからであろう。

³中野編（2013）p.91。

⁴ 同。

⁵中野編（2013）p.92。

⁶ エマニュエル・トッド（2016）『問題は英国ではない、EU なのだ—21 世紀の新・国家論』第二章では、米英が、グローバリゼーションに疲弊していると述べられている。

⁷ 加藤（2017a）では、グローバル社会・グローバル化・グローバル主義の書き分けが十分ではなく、本稿ならびに、他の機会を捉えて、これらの用語について整理したい。

⁸ 『大辞林 第三版』による。強調は本稿筆者。

⁹ 中野（2014）p.42。

¹⁰ 同。

加藤（2017a）で言及した、パット・コンデルやヘルト・ウィルダースらはグローバル主義者ではなく、現実的なグローバル対応を唱える者である。従って、厳密には、彼等が抗しているグローバル社会とはグローバル主義者らの理想主義的なそれであって、現実のグローバル化された社会とは異なるものであると言える。自らがインターネットを駆使して国境を超えてグローバルに連携しているコンデルらの言い分は、グローバル社会という現実を生きて行くにあたり、実際に直面する課題に対処しつつ進むべきであり、従って、現実の課題に対処できないのであれば、国を開きすぎたり（例えば、移民を受け入れすぎたり）、国境を低くしすぎたり（例えば、EU 等超国家が各国を法的にも支配）することは控えなければならない、ということになるのである。すると、コンデルやウィルダースらの主張に従えば、必要によって、一時的に国を閉じることも理論上はあり得る。しかしながらそれは、グローバル主義者らにとっては、自分たちの理想の鏡を打ち砕かれることになってしまう。

グローバル主義者が、コンデルやウィルダース、ならびに、彼らが支持する英国 EU 離脱派・トランプ大統領（と支持者達）に対して、国民投票・米国大統領選挙後も批判・非難を止める気配がないのは、自らのグローバリズムという信念・観念にとって脅威となるものは、いかなるものでも許さないという決意の表れであるのかもしれない。

Ⅲ. インターネット言語空間における「グローバル社会」に抗する者たちの連携

加藤（2017b）では、英国 EU 離脱派の一人で、トランプ支持者を応援していたと見受けられるパット・コンデルが You Tube にアップロードした動画二つを選び、質的分析をかけることにより、コンデルの論点を拾い出した。EU 離脱について言えばそれは、エマニュエル・トッド（2016）第一章で書かれているものと重なる。すなわち、「イギリス議会の主権回復」¹¹や「イギリス人の第一の動機は物事の決定権をロンドンに取り戻す」¹²、言い換えれば、国民が自国についての決定権を握ること（民主主義）を選択するかどうか、というものである。

英国 EU 離脱是非を問う英国国民投票では、移民を受け入れるか受け入れないかが主要な論点であるかの雰囲気が作られ、EU 離脱派は後者を選択しているので排外的だなどという主張に結び付けられていったのであるが、移民受け入れか否かが EU 離脱派の主要な論点ではなかったのである。もちろん、自国決定権は自国民にありとすれば、結果的に（現実を睨みながら）、移民受け入れをコントロールし、場合によって停止するという可能性は理論的にはあり得る。しかしながら、現実的な判断として移民をゼロにすることはできないであろうし、実際コンデルは、*We Saved Our Democracy* という動画の中で、移民そのものには反対しないと述べている¹³。彼が反対しているのは、現行の移民政策なのである。

自国決定権は自国民にありというのは、民主主義の根幹を成すものの一つであるはずなのだが、コンデルや彼がモラルサポートするヘルト・ウィルダースの言論にはそこに、国を開きすぎない、国境を下げ過ぎない、という主張が被さるがゆえに、彼らは排外的極右

¹¹エマニュエル・トッド（2016）p.28。

¹² 同 p.40。

¹³ Pat Condell（2016）*We Saved Our Democracy*

（<https://www.youtube.com/watch?v=THWPJE4xaJM>）（2017 年 9 月 11 日閲覧）。

分子であるかの扱いを受けているのであろう。現在の言論空間では、あたかも、国を開く／開かない、国境を下げる／上げるという変数のみが、民主主義的であるかどうかを決定する要因になってしまっているのであるが、一体いつの間に国の開閉と国境の壁の高低が、国家の民主主義度を測る尺度と看做されるようになってしまったのか。

民主主義国家形成というのは、国を開けば／国境を下れば実現できるというものではないことを、ここで再確認したい。歴史を顧みれば、国境の護りが少なく専制主義的他国に攻め寄せられることもあったし、また、反対に、国を閉じれば安泰だというものでもなく、閉じられた国の中で、人々が圧政に苦しむケースも存在した。ところが、21世紀の今日、国を開くことこそが、すなわち、グローバリズムに則っての政策推進こそが民主的であり、それに反する動きを見せるならば、何故か極右（そして極右代名詞のヒトラー）の如くの扱いがされる。たとえ、それ以外の論点が民主主義的であったとしても、である。

Antifa という団体が形成され、世界に広がっている。日本にも、Antifa 東京、Antifa 大阪、Antifa 名古屋などが存在する。名称から判断できるとおり、ファシズムに対抗するのがその目的とされ、もともとは、Antifaschistische Aktion というドイツ語が Antifa と略されたものである。Antifa メンバーがヒトラー／ナチズム信奉者だと看做した相手には、本当にその者がヒトラー／ナチズム信奉者かどうかは別として、容赦なく戦いを挑む（その中には物理的な暴力も含む）様がインターネット上に映し出され、グローバルに連携する Antifa に対して、反 Antifa の運動もグローバルに広がっている。

ヒトラーは、ユダヤ人さえいなくなれば上手くいく、というイデオロギーの持ち主であった。かかる人物ならびに彼の信奉していたイデオロギーは、人間として許されるものではない。だからといって、それに対抗するという大義名分がある限り、何をしても構わない、というわけでもないだろう。さもないと、ユダヤ人を抹消するためには手段を選ばなかったヒトラーと同じ地平に立つことになってしまうからだ。

そもそも、Antifa が非難する人々が本当に皆、ヒトラー／ナチズム信奉者なのかも疑わしいではないか。このような疑問を持つ人々が、やはりインターネットという言語空間を用いて連携しているようである。

CBNNEWS.COM FOCUS では、*'Peace Through Violence': How Antifa Works to Wreck America* というニュースクリップを作成し、インターネット上で公開している¹⁴。米国バークレーでの Antifa デモが掲げたバナーに、PATRIARCHY WAR と書かれていることを指摘したり、イスラム専門家のロバート・スペンサーの主張を紹介したりしつつ、これは、反ファシズムだとは言いながら、実は、共産主義的グローバル主義運動なのではないかと分析している¹⁵。

¹⁴ CBNNEWS.COM FOCUS (2017) *'Peace Through Violence': How Antifa Works to Wreck America*

(<http://www1.cbn.com/cbnnews/us/2017/september/the-black-plague-antifas-growin-g-influence-in-america>) (2017 年 9 月 11 日閲覧)

¹⁵ 現在、インターネット空間で、文化的マルクス主義についての情報が広まっている。

例えば、*What is Cultural Marxism?*という動画などが公開されている

(<https://www.youtube.com/watch?v=G8pPbrbJJQs> (2017 年 10 月 26 日閲覧)、公開者は EuropeanUnity565)。インターネット上に流れる情報によれば、文化的マルクス主義は、西洋文明を克服するために、イスラムを利用しているとのことであり、

CBN (Christian Broadcasting Network) は、パット・ロバートソンという米国人キリスト教徒により作られた、米国におけるキリスト教系保守系メディアである。森 (1996) によれば、パット・ロバートソンは牧師であったが、1987 年に、大統領選挙出馬のために、牧師の資格を捨て¹⁶、父ブッシュを相手に善戦したという¹⁷。パット・ロバートソンは、米国にリージェント大学も設立しており¹⁸、教育・メディア・政治の多方面から米国保守系メッセージの発信・浸透を試みている。

熱心なキリスト教徒ではないが、保守系だと看做されている英国出身のポール・ジョゼフ・ワトソンという YouTuber は、自身が Face Book から締め出されたり、YouTube 上の動画に閲覧制限がつけられたり等の事情をまとめた動画を 2017 年 8 月 10 日にアップロードし¹⁹、暫く YouTube から遠ざかり、BitChut! というプラットフォームを使っていたが、8 月 29 日に再び YouTube に動画をアップロードし始めた。ワトソンも Antifa 批判の動画を公開しており²⁰、彼自身、Antifa のような団体から非難的になっているのであるが²¹、ワトソンのチャンネル登録者数は、2017 年 9 月 11 日現在、1,030,116 人、動画再生回数は合計 227,286,032 回となっている。インターネットを駆使するワトソンもまた、各国の反グローバル主義者らとグローバルに連携する、理想・イデオロギーとしてのグローバリズムと現実のグローバル化を分けつつ活動する人物である。彼のような YouTuber の動画再生回数が二億回を超えているという事実が、グローバル主義とグローバル化の線引きに目が開かれ、溢れる情報の中で真の論点はどこにあるのかを探索するインターネットユーザーの少なからぬ存在を示唆していると言えよう。

IV. 結語

本稿では、グローバル化 (globalization) とグローバル主義 (globalism) の違いを押さえつつ活動する論客を紹介しながら、英国 EU 離脱派や米国トランプ大統領支持者らの主張を整理してきた。マスメディアやアカデミア等では、現実としてのグローバル化とイデオロギーとしてのグローバル主義との区別を、意図して^{ほか}かしないのか、暈しながらの言説

CBNNEWS.COM FOCUS のニュースクリップで、イスラム専門家のロバート・スペンサーを登場させているのは、このような情報の流れに乗ったものであろう。すなわち、Antifa の活動は、イスラムを利用した、西洋文明に対抗する革命運動であるという解釈である。この解釈の妥当性については、別の機会に考察したい。

¹⁶ 森 (1996) p.219。

¹⁷ 同 p.217。

¹⁸ 同 p.218。

¹⁹ Paul Joseph Watson (2017) *I WON'T BE AROUND MUCH LONGER* (<https://www.youtube.com/watch?v=D8HJrr4-7B8>) (2017 年 9 月 11 日閲覧)

²⁰ Paul Joseph Watson (2017) *George Orwell Would Have Supported Antifa* (<https://www.youtube.com/watch?v=pih9QAA3Idc&t=229s>) (2017 年 9 月 11 日閲覧)

²¹ Paul Joseph Watson もトランプ大統領をモラルサポートしている一人である。2017 年 9 月、ハリケーン・イルマが米国を襲ったが、そのハリケーンまでトランプ大統領のせいにする人々を揶揄する動画を作成してアップロードしている (*The Truth About Hurricane Irma* (<https://www.youtube.com/watch?v=JC2oh5BfPhQ>) (2017 年 9 月 24 日閲覧) と *Jennifer Lawrence is a Complete Idiot* (<https://www.youtube.com/watch?v=af-j1W9PWR0>) (2017 年 9 月 24 日閲覧))。

も見られる。例えば、本稿冒頭で指摘した、グローバル化の流れは止めることができない（ので、英国 EU 離脱・トランプ大統領勝利に拘わらず、）多国間連携・協力が必要だ、というものである。

このような言い回しによれば、グローバル化とグローバル主義が等式で結ばれてしまうため、グローバル主義を否定する者はあたかもグローバル化の現実まで否定しているかのような印象を与えてしまう。現象・現実としてのグローバル化を否定することは文字通り現実的ではないので、かかる言説が言論空間に広がると、グローバル主義に抗する者は現実無視の無謀な輩として、格好な非難的として仕立て上げられてしまう仕組みである。

しかしながら、現実を見て見ない振りをする恐れがあるのはどちらかと言えば、イデオロギーとしてのグローバル主義を信奉する人々のほうではあるまいか。多少の犠牲を払ってでも、グローバル社会の実現こそが素晴らしいという思考のもとでは、グローバル社会（理想郷ではなく現実）の抱える課題に目が行き届かない可能性が大であるからだ。

そのようなイデオロギーとは一線を画しつつも、グローバルなマインドで連携することは可能であり、そして、それを体現している例として本稿では、英国 EU 離脱派や米国トランプ大統領支持者らの主張を整理したのである。

もちろん、グローバル化とグローバル主義の違いさえ押さえておけば、英国 EU 離脱派と米国トランプ大統領支持者らの主張の全貌を掴むことができるというわけでもない。両者を特徴づける変数は他にもあるだろう。

民主党候補指名レースでヒラリー・クリントンに破れたバーニー・サンダースは、左派的立場にしながら、グローバル主義には与することなく、米国第一主義を掲げ、しかも、グローバルに物事を見ることのできる人物だった。彼が民主党内で破れた後は、彼の支持者の中の少なからぬ若者が、トランプ支持に回ったと言う²²。

例えば、サンダースからトランプ支持に転向した人々と、元々トランプ支持だった人々とを比較することにより、トランプに投票した者たちの内なる多様性を見つけることもできるだろう。紙幅の関係で、両者の比較は他の機会に譲りたいが、いずれにせよ、21 世紀の現在、いずれの政治的スタンスを取るにしても、グローバル社会とそこでのグローバルな連携は現実のものであり、そのような連携の舞台であるインターネット言語空間からは、当分目が離せない状態が続きそうである。

参考文献

『CNN English Express』編集部：トランプ演説集．朝日出版社，2016.

エマニュエル・トッド：問題は英国ではない、EU なのだ—21 世紀の新・国家論．文春新書，東京，2016.

加藤知子：インターネットの言語空間におけるグローバル社会に抗する者たちの連携—英国 EU 離脱と米国大統領選挙を手掛かりに読み解く—．星城大学研究紀要 No.17:59-64, 2017a.

加藤知子：内なる多様化の敵か味方か—インターネット空間での Brexit 支持者動画から読み解く—．2017 年度異文化コミュニケーション学会第 32 回年次大会発表要旨集

²² 堤（2016）pp.89－93。

pp.23-24, 2017b.

松村明編：大辞林 第三版．三省堂，東京，2006.

森孝一：宗教からよむ「アメリカ」．講談社選書メチエ，東京，1996.

中野剛志：TPP 亡国論．集英社新書，東京，2011.

中野剛志編：TPP 黒い条約．集英社新書，東京，2013.

中野剛志：世界を戦争に導くグローバリズム．集英社新書，東京，2014.

堤未果：政府はもう嘘をつけない．角川新書，東京，2016.